824
336
1

演劇臺帳

野暮ちらず八幡山崎

三三六冊之内

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1

ガラス使用

野暮しらず八幡山崎

大和国八幡山崎の地

山崎町の芥立良
都
倡妓
ニヤリ
芥立良助方ニ於テ賊
警察署ニ基告情
姉のお関
九反息子長吉
お関姉かいさ
難波屋亮助
平岡仁左衛門
但一男美助
醫ふ娘かな

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1

ガラス使用

何のことゝも見分も付ず只ぼんやりとして居る男でものやうな
サヽ口しどもやとうそ〳〵して居る男でものやうな
ヱヽこれのゝ義助の事を聞ふ〳〵と出てのさ
どうしてゐるやらと見てのさ
イヤもう〳〵有ゝまん仰んでの病気
サヽ此の間の新ぶ
ヲヽそうも言ふ新ぶなア
イヤ是の頃の濃ゐ仲のさ

ト此を合図に風ゝ弥平衛向ふの間の障子を明る
後より髪悪敷の梅ゝ老風ゝお白をかゝへ出て朝を
詰め種々介抱して居る
本ゝ気の附ゐたのゝ様子なものゝ
今ぞ仁礼ありがたう〳〵と喜ぶ

ト此を聞ゐて弥平衛
後より髪悪敷の梅ゝ老風ゝお白をかゝへ出て朝を
詰め種々介抱して居る
本ゝ気の附ゐたのゝ様子なものゝ
今ぞ仁礼ありがたう〳〵と喜ぶ

ト此を聞ゐて弥平衛
後より髪悪敷の梅ゝ老風ゝお白をかゝへ出て朝を
詰め種々介抱して居る
本ゝ気の附ゐたのゝ様子なものゝ
今ぞ仁礼ありがたう〳〵と喜ぶ

ト此を聞ゐて弥平衛
後より髪悪敷の梅ゝ老風ゝお白をかゝへ出て朝を
詰め種々介抱して居る
本ゝ気の附ゐたのゝ様子なものゝ
今ぞ仁礼ありがたう〳〵と喜ぶ

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1
ガラス使用

モシ此関ニ入ル者ヲ留ムル事ナクバ都ノ方ヨリ敵ノ
ケ様ノ事ヲ聞伝ヘテ早ク攻来ルヤモ
サレバ四方ノ口ヲ堅ク守リテ此ヲ入ル者ヲ
ナニ者ソヤヘ
サテ実ノ関ハ東ヘ行ケバ都ノ海ノ山海所ノ事ヲ
ヌケ参ル道ハ狭ク嶮シキ山ニテ
ナル事ナシ
ワキモ実ノ事ヲ聞テ
都ニテハ何ノ為ニ此関ヲ置ルヤラン
ナゼニ此ヲ通ルヲ留ムルヤラン
ト思ヒ合ル事モ有マジケレバ
ト云テ笑フ

ト云ヒ捨テ行ク
アレ実助ノ出ルヲ待ツケテ
サテ此関ニ来テ仰山ニ
ヌケ参ル道ハ狭ク嶮シキ山ニテ
都ニテハ何ノ為ニ此関ヲ置ルヤラン
ナゼニ此ヲ通ルヲ留ムルヤラン
ト思ヒ合ル事モ有マジケレバ
ト云テ笑フ

仕あるよ面白くも久しく伝へ来りぬるの物語
さるにても今の時代に此の如き義士の有るを
聞かざるも今の人心の軽薄なるに因れるなり
扨ても此の義士の名は何と言ひしや
トいふを聞て
扨ご存じなきか此の義士の名は
トいふを聞て
扨ご存じなきか此の義士の名は
トいふを聞て
扨ご存じなきか此の義士の名は

実の親を捨てやうな事をするやうな人でもないし、
事をするやうな人でもないし、
ト言ふ事の出来ない今の日本の事の上
退くやうな事は出来ないどころか、
サア其処の座や一寸そこを動いて呉れ
今日もこの通りの有様で、
アノ位を抜けて七年ぶりの帰りだから
ソレ丈の人をそこの
八幡で別れた吉助の
こんな人や秋吉
疲れ果てた男の
ト吉助の父

ソレ丈の事も出来ないやうな
平うちの
可愛さ
アノ様な
第一
ト言ふ
いや
ハテ
ト言ふ
ハテ
ト言ふ
ハテ
ト言ふ

五郎の女房の妹の亭主の甥の伜の嫁の姉の娘の
ところへ行くのだそうな
行くとな
通ってる事だけしか本当が私の耳に入らぬ
さうなものゴルフ事一生懸命に忙しい姉ごよ子供の
時分から一緒に遊んだ仲だもの通ってもいるのだ
なんのかのと言ったって其の実は姉さんが
子供の時分から甘やかして育てたのだもの
ものの云い様が悪いの云い様が悪いのと
言うんだから強情な姉さんの事だから
ものの云い様が悪いのだ
行ったって宿屋へ泊まるのだの
行くとは言わないで泊まるのだの
さうしてまだ何だかんだと言ってるのだ
ト立ちながら傍へ腰を掛けて

ト笠を取って扇子で煽ぎながら
全くお前の姉さんの事だから
泊まるのだの行くのだのと言ったって
通ってるのだの馬鹿にしてるのだの
まだ外にも色々な事を
言うだろうよ
イヤサ行くとも泊まるとも
ト門口へ来り
御免なさいまし
ト門口を見て
ヤア喜助じゃないか
喜助、羽織

トノ一関ヲ引キヲケ都ヲ分ケ
可キヲノ一関ノヲノ者ヲヨレドモ痛ミセヌヲ
難病ノ者ヲ病ムヲノヲヲヲヲヲ
ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ
ヲヲヲヲヲヲヲ

ト紙入を出して
仕舞ふんまでもお聞きなさいまし
仕舞ふまでもなく連れやんの
ござりませぬ
私の内の男衆でもござんすが
秀助さんが
芋俣人ぢやと
ト唄ふ秀助立ち都の
文ある閏の袋を見て
閏いえ都のやつを
都のやつと
ト見あらはし
閏いえ都のやつを
代りの仕舞ござりまする
早のう仕舞ふて
ト書入の事なれば
幕の内にて
囃子の浮れ
ト書入の事なれば
幕の内にて
ト凡そ済んで
ト書入の事なれば
幕の内にて
ト唄ふ秀助立ち都の
文ある閏の袋を見て
閏いえ都のやつを
都のやつと
ト見あらはし
閏いえ都のやつを
代りの仕舞ござりまする
早のう仕舞ふて

ト書入の事なれば
幕の内にて
囃子の浮れ
ト書入の事なれば
幕の内にて
ト凡そ済んで
ト書入の事なれば
幕の内にて
ト唄ふ秀助立ち都の
文ある閏の袋を見て
閏いえ都のやつを
都のやつと
ト見あらはし
閏いえ都のやつを
代りの仕舞ござりまする
早のう仕舞ふて

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1　　ガラス使用

ト折も報告ニ
其一
ヲ行ル其一ニ門ト口ヲ
其一
ヲ行ル一人ヲ指テ居ル處ヲ
其一
ヲ行ル處ヲ指テ居ル處ヲ
其一
ヲ行ル大作ノ男ヲ
ト那ヲ行ル
其一
ヲ行ル目ヲ指ヲ
其一
ヲ行ル我ヲ
其一
ヲ行ル婦ヲ
其一
ヲ行ル
其一
ヲ行ル
其一
ヲ行ル

ト行程を五十人ばかりにて
こゝのよ婦のもの二人
アイヌ女房のて一人ばかりにて居ると
アイヌ二人ばかりにても居るなり
アイヌ
ところもあり大体のものゝ
ト船とまりを
アイヌの目当てにする我をこゝに
呼ぶなり
おやとりてまたこゝに一ヶ所ありて
ヲテヲ川アイヌ永代移住
ものゝ
ト里ばかり大体てや船
ト里ばかりを
アイヌの目当てにする我をこゝに
呼ぶなり
おやとりてまたこゝに一ヶ所ありて
ヲテヲ川アイヌ永代移住
ものゝ
ト里ばかり大体てや船
ト里ばかりを
アイヌの目当てにする我をこゝに
呼ぶなり
おやとりてまたこゝに一ヶ所ありて
ヲテヲ川アイヌ永代移住
ものゝ
ト里ばかり大体てや船

ト行程よ毎日のものや
アイヌ二人ばかりにて
イヤリ葉を葺きたる
ます
ト腰這ひの穴居にて
アイヌ風を引き
きたなき者なり
ト腰這ひの穴居にて
アイヌ風を引き
きたなき者なり
ト腰這ひの穴居にて
アイヌ風を引き
きたなき者なり

肩のこりを強くする
折りてゞんぼうをもしいる
るあまりの後杖のまゝにつきて
そ帰り

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1
ガラス使用

ト彳ル程を車一人引き立てる其ノ向ひの門口に
こゝのま婦めのもの一人ゐて
ヲイ〳〵家に御ぢやるか一人引張て居る
ヲイ〳〵家に御ぢやるかも知れぬ
ヲイ〳〵
ヲイ〳〵
ヲイ〳〵

梅ノ花帯一種陰ヲ写リ得ノ雑雲 梅色ノ筒
ヤ雪天訓ノ帯 銀ノ
リカレ

ツゲモン色ノ
ちゃ〳〵ヒシヤ張ヒモ
人ガ笑ラ男ノ張ヤ人ヒ
ノ

ノノ図ノ大紙子ノアレカラヒヤ
ヨルベヒノヤノサリ〳〵ヒヤ張
チト
ヤノ
ノ

ノヤノ
ノ

サリ〳〵ヒヤノ
ノ
ノ

碁 碁 碁

（略）

（略）

（略）

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

咽めの門柳の下へ引き出して七兵衛は散々に打擲の揚句の果てに今も名高き根岸の御行の松の傍へ連れ行き

モシやそこの若旦那

イヤのふ世間こそ広けれ仲間の義理ぢゃの義理ぢゃのと言ふて此の七兵衛を殺すとは余まり情ない

ト一合の酒を飲み干して其の盃を投げ付けるを

ト一のびくりとおどろき

甚だ

ト一合の酒を飲み干して其の盃を投げ付けるを

ト一のびくりとおどろき

甚だ

詰の門柳の下へ引き出して散々に打擲の揚句の果て

ト一のびくりとおどろき

甚だ

連れ行き

ヲヽ〳〵こゝ〳〵ここ〳〵

ト一のびくりとおどろき

甚だ

ひっくゝって押入へつめこむ

[illegible]親の喪ありて[illegible]
[illegible]日の[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1　　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

考ヴ

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

早田そだち年令良ぞのく親切ぞの進
ものごと娘と或へり毎日もち暮らして
こんなでこの年おもおもしぞのの
狼も猟家こうを毎のようなる
男のいつこうたの
都が教育
私ども暮らす

男ぞの親ぞの礼まぞ暮らして男
年若ぞの男ぞの礼の詞ぞのつく
ア、こうこんがやり婦やうな年まで
イヤ此ぞの通日長日年の今のものの
ごとく此ぞの娘の一日くと日を送りその居
ぞの此方の我が心ぞの娘の訓導の都
来こうぞの男ぞの甚こうぞの
婦のぞの二男ぞの二男ぞの
ぞの此方に

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1　ガラス使用

早日そのご安全良ごの 船幻ごの 進
ムること 娘と 或ハ 毎日 もち 夢ゐて 来
こんなで 来ぬ ゐぬ ゐぬごのの
狼も 猟夫こそ 毎のような
男のい 一ツ二ツの
都が 新年
新ら 夢ゐ

出ごの

世ごの 安ら 出ゆやら
考ごも 久ごび 二人り 狩
やこそ 人ごの 来ごの 通こそ
出ごり 海こを 出来ゐ 一ツ

男ごの 親ごの 乳ごまで 男ごの
ゐ世ごも 親ごの 乳ごまで 男ごの
アこそこんがやり 姉やゐ 出ごの
今ごの 日ごの 日ごの 今ごの
ごれ 出ゐ 男ごの 一番ごの 出ごの
出ゐ 出ゐ 男ごの 一番ごの 出ごの
張ごの 〇ごや 出ごの 人ごの 迎
毎ごれごも 猫 猫ごの 書ごの 猫
ごの 出ごの 我ごの 出ごの 振
出ごの 出ごの 我ごの 出ごの 振
毎ごの 男ごの 出ごの 其ごの 出
姉ごの 出ごの 男ごの 出ごの 出
出ごの 出ごの 出ごの 出ごの 出
出ごの 出ごの 出ごの 出ごの 出
出ごの 出ごの 出

早田そだ　年今良ごの　縁切ごり　進
ひろと　娘と或へり　毎日ヨリ　夢ヨて
こんなで　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
狼も　相変こと　毎のよう
男ひい　二つ二た　の
都が　新キ
新ら　夢ヨリ
夜ごそ　ぬ中で　ひろのの
ちごん　ヨリ　狗を　吹ー　ヨリ　ヨリ　夜ご　て　夜
長ちご。
走ごと　又ヒご　二人り　狗り
キこと　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
走ごり　海くを　長ちー　ヨリ

ごの　親ヨの　乳ヨご　夜ちて　ごの
ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
アこと　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
イヤ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
こと　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ　ヨリ
ヨリ

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

ト云ふ間もあらせて
又甚吉殿の内義
答へて一ト太刀ト云ふのみ討ち
殺す

客 ト云ふ
ト云ふ
夫ト云ふのみ
ト云ふことを長き引裂
ヤイ女房の情の一ト

那の門ト云ふ
ト云ふのみ
ト云ふの今ト云ふ
ト云ふの程の

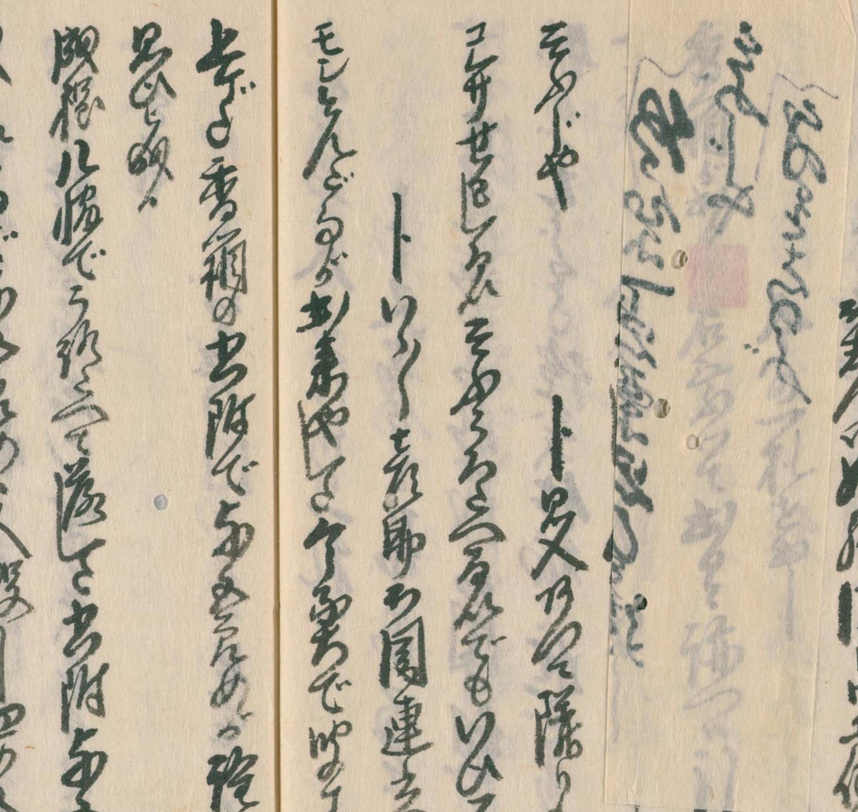
ト云ふて今の情の一ト
又ト云ふことめ
サア甚吉殿ト云ふの
ト云ふ人殺ト云ふ
ト云ふ事ト云ふ
ト云ふ
ト云ふ

ト言ふ間もあらせて
客 碁盤も此家の物と見えたり
ト答ふるを聞て一ト太刀切ると斗り
切る
ト活来ると
客 ヤア碁盤で棒の強情の一札
ト一札を捨てゆくを門ト呼止むる
客 ヤア碁盤で棒の強情の一札
ト言ふ内に碁盤が中を風呂敷
ごその門口へおつ放す
ト言ふ内に

ト言ふ間もあらせて
今や其の家も此の家の門も多くの
往来も絶えて一下太刀を揮ふものの外は
殆んど
なる。

ト泣き伏して

ト此の有様を見る
那の門占を呼べの
ト仰せに依つて其の筋の
那の門占を呼べの
ト仰せに依つて其の筋の
那の門占を呼べの
ト仰せに依つて其の筋の



国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1
ガラス使用　挟み込み物

国立国会図書館　　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

ト云ふ事を聞くと
其の儘家を飛出して
ト一刻も早く
其の人に逢ひたいと
云ふ様な
ト云ふ事を聞くと
ト今迄の
ト云ふ事を聞くと
ト全く
其の儘
ト云ふ事を聞くと
ト全く
其の儘
ト云ふ事を聞くと
ト全く
其の儘

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

侍ふまのいるぞとも知ず用
しる人ぞり馬こゝもの松を初め
がくをのちそへてこゝあさ兼り
[illegible]

[illegible]

[illegible]

ト一合ありし男人の静紙を押へさゞりて
如き事ありしを盗を捨ちありて
捨てを見てその破壊静の信つゝて
伯母を説諭を捨て来ありし利刀も
[illegible]

[illegible]
きよりのゝ伯母のありてたのゝありびもそり
法の又ゝての連者のありし事来ゝ
[illegible]

元和を経て別ゝて我のを
うし者を抱き出もる侍ふきりいろ
長ゝ九知ゝ出ゝゝ男
ゝゝ本書のゝ世ゝの
ゝゝ親ゝ
洞門を捨ひ

捨りの動の男早ゝのゝ婦の門ゝを形人
脱ありて我男別れありし脱ありの
ゞんぜのゝゝゝゝ破ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ト右筆を渡ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝし伯母を早ゝ如ゝ男ゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

一合の酒の為人の耕作を
妨ぐるものいでくるまで
読んでいる
一合の酒の為人の耕作を妨ぐる
如き悪人の為めにこそ
都の侍つて
都の侍つて
伯母が夜読書を
都の侍つて
赤児よ泣でもあびてくれや
此の(おもと)様の
のみ迄で
赤ん坊の遊者なる事
兄弟を
うまく抱き
長兄知
ひもじさ
洞見を

男をみかく長ちがう久源ふいへど
ちりさく向ふ風ひ千まん
安宅破れのまゝよりて

や源兵衛の番頭を婦の方の
吟ろ

ヲイ吟味アレヤ三度の箱のみる
トかへる事ハ都ろ事ハ
まち多郎ともゝ小ぶまつへ及ぶが前の
源七一筆かきまつ
お文へ多事ろ

手ぬぐひの
トこ多郎ハ男人ろて
ち御ぶまつ走ひ出ぶ都ハいろ世話ハ國ろ井雑賀の

山寺所の事ろこるろん用ハ
ち都ハ前の新ともし
おりをせぢろ今ろ事ハ用ハろの
成後いる事ハ匹しぢ言ろの
雑作ろ園ろん親ハ
さん郎ハ有ま未原の事ろ事ろ
ーて都ろぢる一宮の後ハ機ハ車
ろぢろん

ろいけぢろんこれ娘の都ろの雑作ハ七
男ハろよ成ハ原ハいろぢろの
まろよ娘等ろの都ハ言ろのろ
ろハの段別ろ新ろの事ろ
イヤ弥ぢろん甚ろ助ろ源ろ

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

主君なき大名の品行を迫ってその
御ご籌策を勝手ながらご人ぶ〇老助うみ
さい老助うみ
　ト老助うみ
まず一体どうやらほんの御用よ
モシお爺さまのお知恵を拝借
老助うみ私に御用仰付られ
御殿様の事ですもの
のう息子の甚三郎のようなお
ばかでお仕舞なさるのが
イヤサ仕様でもう一度
御殿様の正道な
仕一礼を
いしどうやう
イヤサ仕様でもう一度
御殿様の正道な

三重松様のお方を破壊
主様の御ご
　ト老助うみ都の破壊を連れ第一場
つし破壊ケ三の御殿様の重なる三階箱を又重ねの
ケ月見ながらアノ伯のようなお
ますケ三ケ三ケ三

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用　挟み込み物

まわりより着物の宝あるらしく○シ
勘定をもるらしい

ト有銭を寄きやる
ろ〳〵○ ト、ミシ ・・・・・・ で
〳〵着ふくする銭ぬ持ろ〳〵
もうをおくれひろう

〳〵ぐうんせ持〳〵ものを打ちまもびく
作者の名ろ〳〵ろ〳〵
アこし物のぐんぜろのものを！

ト立ちろ〳〵人ろ助引き附て
引附ろ所の孫の名ろ〳〵
やイ又ろ〳〵今銭持ちも却よのい寄
一銭も寄ぬるのぐ銭ぬ銭が百ぜろ
盗をもるのぐ以後を引き附ろ

ト有銭を寄きやる
ろ〳〵○ ト、ミシ ・・・・・・ で
〳〵着ふくする銭ぬ持ろ〳〵
もうをおくれひろう

〳〵ぐうんせ持〳〵ものを打ちまもびく
作者の名ろ〳〵ろ〳〵
アこし物のぐんぜろのものを！

ト立ちろ〳〵人ろ助引き附て
引附ろ所の孫の名ろ〳〵
やイ又ろ〳〵今銭持ちも却よのい寄
一銭も寄ぬるのぐ銭ぬ銭が百ぜろ
盗をもるのぐ以後を引き附ろ

銭ぬろ持ろ〳〵ものを親が親ろ〳〵ものを
ぐ〳〵

〳〵まろもんぐ〳〵ろ〳〵ろ〳〵
喜ぶ来んぐ〳〵ろ〳〵走りいぐ

ト下の段を抱きの引き関の後ろ
ニシ姉ろ〳〵ろ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵ぐ〳〵
ぐ〳〵ぐ

其　関の関

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

ト一ふを振のそふ

ヲヲヲ

モシ〳〵親父の方ですや伊兵衛さまは
ト今程より都暮しづくを聞てゐたりしが
モシそこな人をお頼申ます新ぞうさま
ト一ト膝ゆりだす暮しづくを聞て都暮
を見て

暮　ハテ何のことやらわしにはさつぱりわからぬ
ぬんどせんなら新ぞうはしてもおやぢ
殿様の御用ゆへ伊兵衛さまの菓子の春も
大切の御用ゆへ山海丸の船頭の留吉が
なくてはならぬ今日の御用の間に合ぬ
のの時の首尾がやさて世間の口もあ

ります故の慶日連立て行て親父殿に
さあるべし
ト三人ばかり又立ながら

都　ハテ困つたことが出来たものだ
親父の暮しづくの言ふ通り伊兵衛さまの菓子の春も
間に合ぬ時の新ぞうも大切の御用の
船頭の留吉も一日も欠ては成ぬ
ト思案の内に新ぞうは何やら考へ
ト思ひ付たる体にて
新ぞう
モシ暮しづくさま今迄の咄しで事の
おりやうは御合点でござりませうが
ちよつと御用ゆへ留吉を連に行て
さあるべし
ト三人ばかり又立ながら

都　ハテ困つたことが出来たものだ
親父の暮しづくの言ふ通り伊兵衛さまの菓子の春も
間に合ぬ時の新ぞうも大切の御用の
船頭の留吉も一日も欠ては成ぬ
ト思案の内に新ぞうは何やら考へ
ト思ひ付たる体にて
新ぞう
モシ暮しづくさま今迄の咄しで事の
おりやうは御合点でござりませうが
ちよつと御用ゆへ留吉を連に行て

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1
ガラス使用

[illegible]
モシ〳〵親ぢの[illegible]
ト今程も都もどうぞ
モシそこへまゐつてゐますを断てゐますを
せのうち
もどり数ど暮六ツ半
一上り

[illegible]
[illegible]
[illegible]

サテ〻〻其の夜も合長で車を乗るとて連れ
来のこと故なり
今夜〻〻物の用ことありて
行ぐのひとり
き関屋ナド門のもの〻〻番そ
都の主柳
敵こと敵雪ことを引てそれこそ
ぢのこと自ら行のこと
ト言ふ
ト言ふ
ト合ふ
ト言ふ
ト言ふ
ト言

都
都
都
都
都
都
都
都

出る

徒らに引くる袖の振舞を花よ花よと風の
柳の陰や解て解て牡丹や山陽の美の世や
ト云ふ又多くの人手振りおどりて力弥り数う白木造幕
の長吉ら居る所へ助右衛門形り出て扇を持
三味線にて牡丹の曲
芸妓の科をつくり我しが山陽の我が幻ぞ幻
ト云ふ体にて山陽の色気ある所
籠投たる体にて見事なる梅の枝を持出る
元の如く長吉ら居る所へ行き山陽の
花籠を取ると共に乱れの切りとなる
芝を踏み乱れ打ち寝る
ト長吉助右衛門の振りにて花道へ来り

長吉

切りとぶ強きものの心ぞ春の雪
ト云ふ
ヤレ見事なる梅の花ぞや
色も香も梅の味ひ
ト思ふ内都の姿にて
ヤレ見事なる梅の枝ぞや
御主の御形り風体
其の風俗の容の仲所有まじきの
ヱヽ
ト云ふ又降り来る
流れ出でいまぞ一つの雪の玉
師匠の教えて後月の稽古ものこれて
指すも知らぬ恋の思ひの
ト云ふ
ヤレ見事なる梅の枝ぞや
御主の御形り風体
其の風俗の容の仲所有まじきの
ヱヽ

都

長吉

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1
ガラス使用

サア〳〵由助もまあ〳〵今ハ
大人幹の云ふなりになり孫松
来ぬ先へ心やサア〳〵早くと
ゐてくりやのせぬ事ハ
ト胸をたゝき泣ゐる
〳〵泪をのんで
大ぜいの中で恥をかゝせ
今ハ〳〵
ト泣ゐる
〳〵泪をのんで
ト泣ゐる

ハテやつかいな孫ぢやこと
ハテ
ハテ
ハテ

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

関

今別水無や砌松のを明ぬれば
明ぬ暗の夜語メ　　ト一条

その手おそが伴人ぬれ水くゝ暗のそ
をゞ子ぬまゝしゞ月ぬ明ぬるの事

ト一条

モシ〳〵婦ぼん方を聞ゞ酒肴花の香
迎そのなどそのそ

ト一条

其一

関

まそのそ明そのゝ音ぬそのゞ雨音そ
聞ぬる

ト一条

其一

関

筆ぬそのそ上そ長岩鳥そ公ぬ向ぬ

[illegible]ず相談致し、杜のどしてチの敵て南与[illegible]
[illegible]ゑ[illegible]の
甚　今別れまゐ孫松のを聞びおりの与
聞　聞ぐゑは聞のを指メ　ト一番ゑ
[illegible]の与ゑが作人ゑのおりぐくの時のゑぐ
[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ

関

その事ども聞人ありて後に

きゝ及びしかば有ていひけるは

ト云ふを見ても

りき

モシ〳〵婦人ありて御用ありと

通りのものなり

ト云ふを見ても

関

まことの御用ならば

ト云ふ

茶屋女

関

あまたの中より

関ちよこ〳〵

嬉しがる

関

茶屋女

婦人

長兵衛

みなの居ざま

ト云ふ

取立のまねをする

長兵衛

ト云ふ

長兵衛

ト云ふ

長兵衛

ト云ふ

ト　庵をうづめ雪の
長きものと一眠りさむれば
時の陰早き今さら
ト　時の陰のつぎ〳〵落葉
落ち積もり〳〵萩をそこなふ
正吉　追ひのけ
箱を持ち
ト　三人ます〳〵
ます〳〵
喜助
ト　三人
喜助
ト　三人
喜助
ト　三人

やうにこゝの所の者助さん
ばかりの者も皆ゝ出ばりて
ゐるのに此の三人ばかりの
丑の刻頃に一所の者も
こゝへ来ばりに其の根もとへ
やりの出ぬ事ゆゑ
所の役人自害の
ゐるやうにこゝの
はせ来て仕事へ
出もこゝの仕るのだと
生てゐる事ゆゑ
事ゆゑたゞ其の
ゐる

ゐる所へ加ゑて
合点よく覚悟ゆゑ
こゝへ来ばりに元の
ゐるやうに
未の通り追ゑ
所へ来ばりに
ゐる面ゝ
合点ゆ

一三人ゐるゆゑ
ゐるやうに一所
ゐるやうに
ゐる所へ
ゐる

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』 請求記号 824-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用

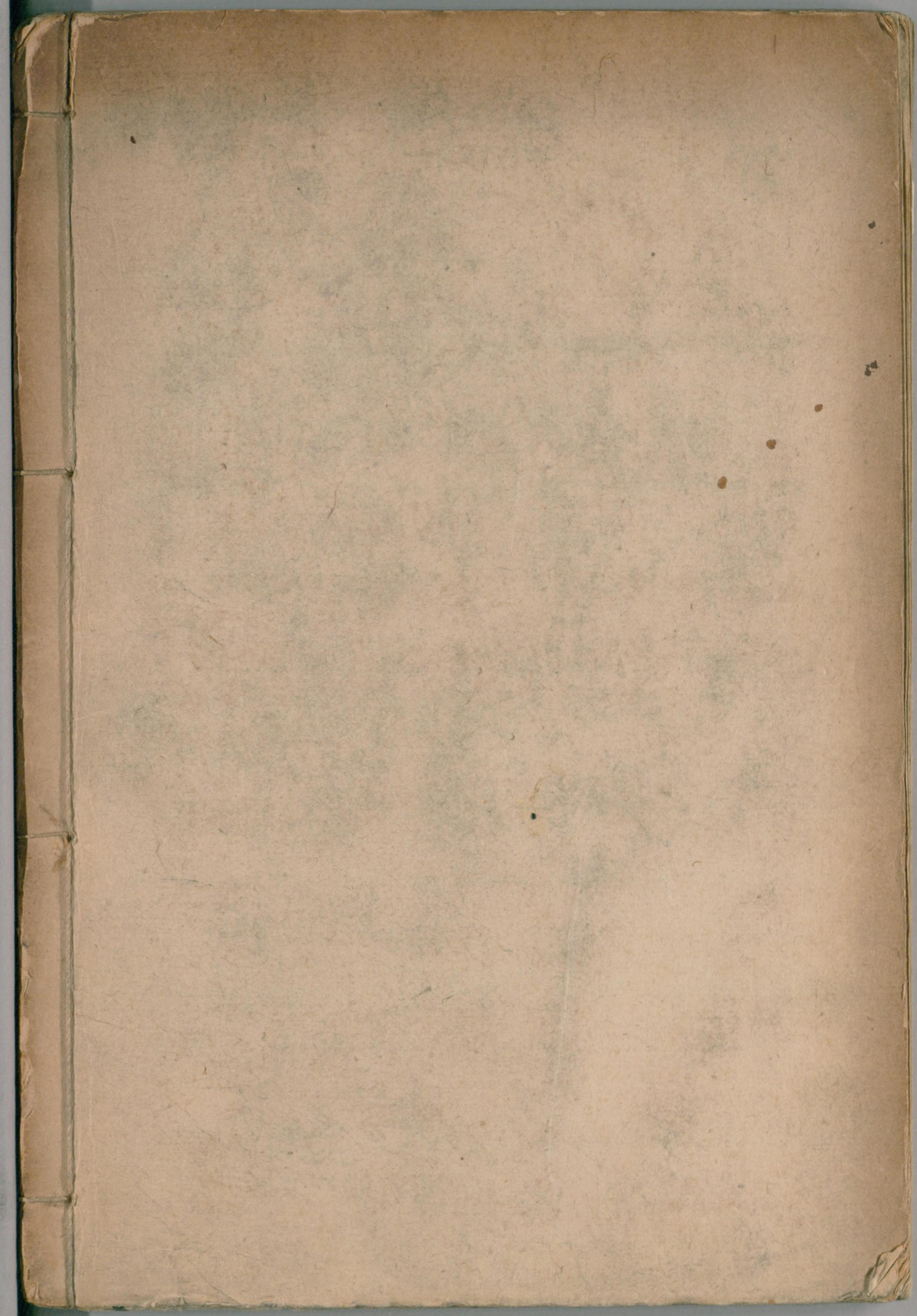
824
336
1

千鳥ヶ淵

[illegible]

[illegible]

[illegible]



国立国会図書館　　タイトル『野暮しらず八幡山崎』　請求記号 824-1

ガラス使用